

④ 日が落ちてから、少年はシライさんと二人で家に戻った。

じゃあもつとたくさん食べて、もつと大きくなりたいな。」と笑ってくれた。

「ボクは大きくなったら、何になりたいんだ？」

祖父の字だ。まちがいない、これはおじいちゃんの字だった。

〈愚息もようやく一丁前になり、孫もこの四月で六年生です。三代で船に乗れたらうれしいことです。〉

年賀状だった。差出人は祖父。印刷された文面の横に、手書きの一文が添えられていた。

シライさんはバッグから別の封筒を取り出して、中に入っていたはがきを「特別に見せてやるよ。」と少年の前に置いた。

なくて、おじいさんが生きてるうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……。でも、昨日ハジメさんから連絡もらってうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ、って。」

「仲よくなったっていても、俺は東京だから、年賀状のやりとりぐらいしかでき

おかげで、祖父や父とすっかり仲よくなった。

シライさんはおかしように笑った。

「今は、生まれつきの漁師です、って顔してるけどな。」

「そうなんですか？」

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ってたんだ。」

「……はい。」

「ほら、この頃はまだお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ。」

ける。ずっとそうだった。毎日毎日、それを繰り返していた。

から家に帰ってくると、頭からはずしたタオルを水洗いして、物干し台の針金に掛ける。

くるけん。」と港へ向かう。漁を終え、魚市場に魚を卸し、仲間と軽く一杯やっ

から変わらない。最後の漁に出たおとといもそうだった。出かける前に庭のほうに

7 文面

愚

結

8 雰囲気

継 雰 掛 卸